

# 被災地ボランティア報告

9月29日（土）足高1年生19名で被災地のボランティア活動に参加してまいりました。今回の活動は足高同窓会よりボランティアの話を紹介していただいたものです。

当日は朝4時30分に足利を出発し、宮城県山元町の「おてら災害ボランティアセンター」に向かいました。ご年配の方のお宅の草刈り作業のお手伝いをさせていただいた後、現地の方の講話を聞かせていただきました。

生徒達にとってテレビ、新聞等の報道で見聞きした情報だけでなく、自分の目で見て、現地の方の話を聴き、実際に復興に向けた活動を体験することで改めて東日本大震災見つめ、今後の支援活動について「自分なりに出来ることはないか？」と考えるきっかけとなりました。

以下は、ボランティアに参加した生徒の感想です。

私は実際に被災を受けた宮城県山元町という所に足を運びボランティア活動をしてきました。そこで私が最初に見たものは、瓦礫やゴミがあたり一面に散らばっている何もない平地でした。私はその光景を見て圧倒され、テレビで見たときとは全然違う何かを感じました。家は何軒か建っていましたが、人は住んでおらず、音も何も聞こえてきませんでした。

その状況を見て私は、この被災地のために何か力になりたいと思いました。ボランティアの内容は、雑草取りでした。雑草取りと言っても範囲が広く大変でした。他の人から言えば、ほんの小さなことかもしれませんが、その小さなこと一つ一つが重なることによって大きな物に辿りつくと思えます。私は被災地に行ったことで多くのことを学び経験し感じる事ができました。これからも被災地復興のためにいろんな行事に参加していきたいと思いました。私は被災地がより早く復興できるよう心から願っています。

阿久津 竜一



私がボランティアに行ってみてまず感じた事はあまり地震の影響はないのではないかという事です。普通に車も通っていて、人も普通に住んでいたからです。しかし、海に近付くと、一気に景色が変わって建物が少なく、殺風景になってしまっていたことにとっても驚き、ショックを受けました。ごみがたくさん落ちていたり、草が生え放題で使えない線路などもありました。中でも一番見て辛かったのは、津波で骨組みだけになってしまったコンビニエンスストアです。前までは毎日何人もの人が利用していたのに、



現地に今も残る瓦礫

ある日突然地震や津波に襲われて一瞬であのような姿になってしまったのだと考えるととても辛くなりました。今回ボランティアをすることになった家の周辺にもやはり草が生え放題で震災のひどさを物語っているのを感じました。

今回は草むしりという小さなボランティアでしたが、まだまだ復興に時間はかかるが地元の人たちはとても元気で前向きなことが分かりました。今回のような経験はなかなかできないので日常生活の中でも節電をしたり募金をしたりと、これからも被災地の方の、力になれるよう努力していきたいです。

新井 健留



東北ボランティアに行き、私が強く感じたことは被災地と非被災地での温度差です。今回足利から目的地まで、5時間という長い時間をかけて移動しましたが、高速を降りて海岸線に近づいていく度に建物が少なくなり、人がなくなってきているのを肌で感じました。その程度は激しく、進んでいく度にとっても衝撃を受けました。

私たちの行った山元町は、被災からしばらく月日がたってもボランティアを受け入れず自分たちで作業をしていました。そんな中、町の方々のために住職さんが自らおてら災害ボランティアセンターを設立し、全国各地からのボ

ランティアに対応したという話を聞かせてもらい人の心のたくましさを感じることができました。

今回、こういった機会被災地まで足を運び、たくさんのことを学び感じることができました。またこのような機会があれば参加したいです。 川田 大貴

宮城県亘郡山元町へ行き、とても貴重な体験ができました。被災した当時はテレビのニュースで被災地の状況が報道されていましたが、今はあまり報道されなくなってしまいました。だから、被災地の今が知りたかった私はこのボランティアに参加しました。行く前までは、復興が進んでいて、人がたくさんいると思っていましたが、実際に行ってみると、家の柱だけしか残っていない所、家があっても人は住んでいない所など、自分の想像を超えた情景がひろがっていました。被災地の状況はまだ復興までにはとても長い時間がかかりそうで、まだまだ全国民の人たちの支援が必要なようでした。このボランティアで行った場所、見たこと、聞いたこと、それらはこれから一生私の中から消えることはありません。私はこれからも東北への支援やボランティアには積極的に参加したいと思います。 小林 友哉

私は生まれて初めて、ボランティアというものに参加しました。始めは不安でしたが、東北の人たちのために力になれると思ったら、そんな不安がなくなりました。そして当日、現地に着いた時、私は驚きました。なぜならほとんどの家が建っていなかったからです。津波の被害は受けたと聞いていたけれど、予想以上でした。電車が通っていない立入禁止の駅、骨組みしか残っていないコンビニ、そして辺り一面、雑草だらけの町、私は改めて東日本大震災の恐ろしさを思い知りました。ボランティアセンターの人の話を聞いて、ボランティアが沿岸部に入れるようになったのは最近で、それまでは山元町の人たちが自分たちで身の回りの作業をしていたことを知りました。私は、もっと正しいやり方があったのではないかと山元町のやり方に少し疑問を持ちました。私たちは草むしりしかやっていないけれど、この行動が一人でも山元町の人を元気にしたと思うと、とてもうれしく思います。またこのような機会があれば、進んで参加したいです。 須永 駿



去年の3月11日、私は中学校の教室にいました。突然の激しい揺れの中、恐怖が私を襲いました。しかし、蓋を開けてみると震源地は宮城県。あまりの遠さに驚くとともに「東北は大丈夫なのか。」という心配がわいてきました。その後のニュースでたびたび流れる津波の映像、流される建物、逃げ惑う人々、これらの映像はこの世のものとは思えないほど残酷で私は大きなショックを受けました。その悲劇から一年半が過ぎた今、やっとボランティアに行く機会を得ることができました。今までボランティアに行きたくても行けなかった私には逃すことのできないチャンスでした。

そして迎えた9月29日。これから行く被災地に対する不安、「自分が被災地のために何ができるのだろうか」という期待。その両方を抱えながらバスに乗り込みました。

実際に現地に着いてみると、予想をはるかにこえるものでした。テレビでは見ることができない被災地の現状が目の前に現れ、「言葉を失う」というものを初めて実感し、これも復興の一部なのかと思うと頑張ることができました。被災地は、一年半がたった今も復興の兆しは見えてきません。しかし、今回のボランティアでわかったことは少しのことでも被災地のためになれることです。これからはもっと被災地のためになれるようにこのような企画に積極的に参加していきたいです。 新井 友也

2011年3月11日2時46分。最大震度7、マグニチュード(M)9.0 観測史上最大の地震が起きた。それから、約1年半。私たちは被災地の宮城県山元町に行ってきた。山を越えるとそこは同じ日本とは思えない光景が広がっていた。辺りには数件の家と瓦礫の山、残った家も窓ガラスはすべて割れていてとても人が住めるような状態ではなかった。また、同行してくれた方の話によれば、リフォームして住み始めている家も何軒かあるそうだがそう多くはない。数えるほどだ。そこで私たちは、リフォームをして住み始めているお宅の草むしりをするようになった。その作業は意外にも大変であった。しかし、このような作業を被災地の人々は1年半もの間、してきたと思うとこれっぽちの事どうってことないと思えた。むしろ自分が情けなく思えた。それにもっと頑張れるといった気持ちになれた。その後ボランティアセンターに行き、お話を聞いた。そこで心に残ったお話は結局自分で判断して行動しなければならないということだ。これは震災復興だけに関わる話ではないと私は考えた。最後に、この活動により少しでも被災地の力になれたのなら非常にうれしいと思う。また、このような経験は、まれに出来るようなことではない。まずこの企画を立ててくれた足高OBの方々に感謝したい。そしてこのまれに出来ない経験をもっと多くの人たちとシェアしていきたいと考えた。そうすることによってみんなの気持ちがひとつになってくれたら良いと思った。 国森 敬大



津波によって流された住宅跡

9月29日、東日本大震災の復興作業を行うために宮城県の山元町を訪問しました。山元町を見たときの第一印象は荒れ地が多く、人が少ないというものです。住民をあまり見かけず、道を通る人たちのほとんどがボランティアの方々、生活をしている雰囲気はあまり感じられませんでした。だから草木は生え放題、道路がきちんと舗装されていなかったため足利での何気ない生活が幸せだったと心と体を通して知ることができました。



僕が被災地を訪れて驚きを隠せなかったことは線路が使えなくなっていたことです。線路からは草木が生え、駅のホームの一部は陥没し、地震から1年半たった今でもこの様な光景があったので唖然としてしまい、自然と悲しくなりました。

復興作業の主な内容は民家の草取りでした。草木は長い間放置されていたので根が深く、何より量が多かったです。しかし、足高生19名と大人たちの力で作業は着々と進み、4時間ほどで作業は終了しました。

休憩時には周辺を歩きましたがやはりテレビで見る被災地と生で見る被災地は違うなと感じました。生で見ないと分からない町の静けさなどが身にしみて分かりました。そのなかにも「自衛隊さんありがとう」などといった心温まるメッセージもありました。

ボランティアセンターでは地震発生後半年はボランティアを入れられなかったりするなど大変な思いをしたなどという内容です。

完全に復興するには多くの人と時間が必要です。今回の経験が無駄にせず2回、3回と復興作業を続けていきたいです。

清水 誉史

自分は、地震が起きた時から絶対被災地に行ってやると思いがありました。しかしなかなか行けず諦めかけていた時にチャンスをもらいました。地震が起きてから一年半がたったので、「まあある程度は復興しているだろうな、もう少し早く来てあげれば良かったかな」と思ってバスで考えていました。しかし現地に着いてみると、考えていたことと全く違っていました。雑草はたくさん生えているし、水も流れていないし、コンビニであったら所も鉄骨だけ残っていました。一番驚いたのは、線路が曲がっていたことです。海から距離は結構あるのにも思いました。自分はその時、自分にもできることはたくさんあると思いました。結局、自分たちでできたことは草むしりしかできなかったことに非常に悔しさを感じました。絶対にまた被災地に行って少しでも被災地の役に立ってあげようと思いました。時に被災地に行く前はもっと生活が便利になればいいなと思いました。しかし、山元町の皆さんに比べれば今の生活に文句を言わず、毎日に感謝して生活していきたいです。



菅谷 良太

### 1. この企画に参加した理由

震災後何か被災した方々のために力になりたかったのですが、自分ひとりの力ではどうする事も出来ずいました。そんな時足高 OB 会の方々がこのような素晴らしい経験ができる企画を立ててくださったので参加したいと思いました。

### 2. 参加して思ったこと

参加して思ったことは自分が思っていた以上に復興しきれていないということや震災から1年半たったのにもかかわらずがれきの山が片付いていなかったり、地面に穴があいていたり、復興にはとても時間がかかるということです。

また、今回のボランティアは草刈という小さなことだったかもしれないが、この小さなことの積み重ねがいつか大きなものになるという話を聞いて参加してよかったと強く思うことができました。

### 3. これからしていきたいこと

自分はこれから現地の状況や被災した方々がいまどうしているのかということをもみんなに伝えたいです。震災後の山元町はボランティアを入れなかったことや、支援物資の食べ物は人数分ないと捨ててしまうことなど、初めて知ったことが多かったので、これらのことをみんなに震災に関心を持ってこういう企画に参加してくれるように伝えていきたいです。そして、今回被災地に行ってボランティアをした経験を日々の生活に活かせるようにしていきたいです。

高橋 祐樹



9月29日宮城県山元町にってきました。私は復興支援はもってのほか被災地にも行ったことがありませんでした。だから被災地に初めて足を踏み入れ、テレビで見るよりダメージを受けていることがわか



りました。「ポツ、ポツ」とある、新築の家はほとんどの家が住んでいない状態で、あたりに広がる荒れ果てた土地には家が建っていたことを訊いて、心のどこかに穴が開いたようでした。その他にも、鉄骨が向き出しになったコンビニ。線路がない壊れた踏切。荒れ果てた駅のホーム。今ぼくたちの身の周りにこのような事が起きたらどうなるのでしょうか？被災地を見ると「普通に暮らせるのが、当たり前ではない！」この言葉の意味が伝わってきます。しかし、壊れた踏切にはコスモスが咲いていて、被災地には多くのボランティアをしている人がいました。少しずつだけ

復興に向かっていていると思えました。わずかですが力になれてよかったです。 高松 広梓

私は震災後、東北へ行ったのは二回目でした。今年の夏休みに宮城県の松島の方へ行きました。松島は島がたくさんあるので、津波の被害が少なかったようですが、遊覧船に乗り多くの島を見て、中には地震の影響で少し崩れてしまったところもありました。海の近くの店では中まで土砂が入ってきていたと話に聞きました。しかし、被害が少なく、観光名所ということもあってか、震災にあったとあまり感じませんでした。ですが、今回山元町にボランティアへ行き、衝撃を受けました。流されてしまった線路、積み上げられたたくさんの木、荒れた駅など、テレビでしか見たことのない震災の風景を生で見ると、唖然としてしまいました。自分たちが普通に生活している中、東北にはこんな環境の場所もあるのかと思ひ知り、東北の方々のために少しでも力になればと自分に何ができるだろうと考えたところ、与えられた作業を全力で行うことだと思えました。草むしりというほんの少しの手助けだったかもしれませんが、東北の方に少しでも役に立ったなら幸いです。今回のボランティアを通して私が感じたことは、助け合うということはとても大切なのだということです。どんなことでも相手のために努力することで絆が深まっていくのだと思えました。今回のボランティアをきっかけとして、またこのような機会があれば、積極的に参加していきたいです。 山口 大輝

9月の29日、私は宮城県の山元町へ復興ボランティアとして行って来た。バスに揺られること約5時間。まず我々の目に我々の目に飛び込んできた最初の光景は、見るも無残な姿となった踏切だった。根元からなくなっていた遮断機は津波の恐ろしさを物語っていた。コンビニエンスストアと思しき建物も骨組みが露出し、シルエットを残すのみであった。点々と残っている民家もよく見ればガラスや1階部分がなくなったりして人々の生活感を感じられなかった。土台しか残っていない家もあり、それらを見た瞬間私は激しい虚無感に襲われた。故郷が津波に襲われた人々の気持ちは一体どんなものなのか。

そんな複雑な思いで私は作業場に到着した。我々の仕事は高齢な家主のお庭の手入れである。さすがに男子高校生ら20余名での仕事は速い。気づけば無心に体が動いていた。普段はあまり接することのない他クラスの仲間とも協力、会話し、繋がることのできた。

休憩時に駅の跡に行くと、そこには自衛隊やボランティアに対する感謝の言葉が掲げられていた。さらに、その近くに各地からの応援の書き込みが描かれた黒板が目に入った。私は心が温まる思いがした。

このボランティアで少しでも人の役に立てたことを大変嬉しく思う。被災地でも地元の方々は復興のために活動を続けていた。今回の我々の行動が、完全復興への「ひとかけら」となることを願う。

柏瀬 拓巳



一年程前、東日本大震災が起こった。その直後、中学生だった私は生徒会で義援金集めをした。被災地の為に何かをしたという達成感があった。だが、これから復興に向かう為に一番努力しなければならないのは私たちの世代だと思う。そんな気持ちから、今回の企画に参加する事にした。

バスで現地に向かう途中、畑でゴミを拾っているボランティアの方たちがいたり、がれきの山を見たりした。さらに驚いたことはコンビニだと思われる建物が柱と屋根を残して立っていた。海が目の前にあるわけでもないのに…津波がそこまで来たそう



だ。民家も住んでいないものばかりで、流されてしまったものもあるらしい。それを知った時はとてもショックだった。テレビで見たりするのと実際に見るのでは訳が違う。現地の人の話を聞いてとても心を打たれた。私がやったボランティア活動は宮城県の山元町という所で民家の庭の草取りだった。地味な作業かもしれないが、こういう小さいことの積み重ねが大切だと思う。「ひとりで全部やろうとしない。みんなでやっていく。」とある人が教えてくれた。

震災直後に比べて「復興ムード」がおさまりつつある時に被災地に行けたことは、とても貴重な体験になったと思う。被災地でのボランティア活動は他人事ではなく、ひとりひとりが考えて欲しいと思う。私はこの経験をみんなに伝え、ボランティアの和を広げていきたい。 小沼 正樹

今回私は足利発！被災地支援バスパックに参加して、多くの驚いたことがありました。その中で一番驚いたことは、地震と津波による被害の大きさです。私は現地に入るまで今住んでいない家も入れて半分以上残っていると思っていました。しかし、現地に入ったらそれは間違っているとすぐにわかりました。なぜなら周りにはほとんど何もなく地震当日から放置され、雑草の茂っているところが多かったからです。周りの景色は本当に平らな地形でその雑草のあるところにもともと家があったとは考えられませんでした。もう一つはそれだけ多くの家が流されたら瓦礫が多くあると考えられるのにほぼすべて1ヶ所にまとめられている復興の速さです。わたしはこの2つのことから人は協力すれば何でもできると思いました。そしてそこに住んでいる人の頑張っている姿を見て、私も自分の夢に向かって頑張ろうと思います。そのことをこれからも忘れず、これからもボランティアや募金などで多くの人を援助したりそれらの事から多くのことを学んでいきたいです。 高橋 宏徳

今回のボランティアで、僕は日頃の生活では学べない、とても大切なものを学ぶことができました。それは一つにとどまらず、数多く、一つ一つが重く、人間にとって必要なものです。一番強く感じたことは、「諦めない強い心」です。この震災で被害が甚大であったおてら災害ボランティアセンターで聞いたように山元町は修復作業を始めるまでに他の市町村と比べて時間がかかってしまっていて、未だに壊れたままの建物や道路がありました。人口が少ない町であるのによく頑張っているなと思いました。震災で刻まれた心の傷は僕には計り知れないくらい深いはずなのに、前向きに毎日復興に向けて作業をしている町民の皆さんに、かなり心が揺り動かされました。



次は、「協力し合う心」です。復興という目標を達成するために一つになって頑張ることは大変素晴らしい



ものだと感じました。先の見えない状態ですが、その一部に加わることができたのは大変光栄です。これからも機会があったら参加したいと思います。ありがとうございました。 田中 良

今回この東北ボランティアに参加して、改めて津波の恐ろしさを感じた。今回行った山元町というところは、海が近く、津波の被害が大きかった。堤防が決壊し、町の家屋などはほとんど無くなっていた。家があったとしても、そこには人が住んでいなかった。

その非現実的な景色を見たとき、私は最初、全く状況を飲み込めなかった。足利から高速にのり、栃木、福島、宮城、と色々な風景を見たから余計だったのかもしれないが、その荒れ果てた様子は、まるで夢を見ているかのようだった。私はしばらくその景色に目を奪われ、心も奪われた。色々なことを考えさせられた。

作業が始まってからも、そのことしか考えられなかった。家を流された人たちのこと、家族や友達、大切な人を失った人たちのこと、想像するだけで辛かった。まだきっと、心に大きな傷を負っているだろうと思っていた。

しかし、現地の方々には自分の想像とは違って、自分より辛い思いをしているはずなのに、自分と同じくらい、いや、自分より元気なのではと疑うくらい明るい顔をして、私たちに声をかけてくれた。また、災害センターへお話を聞きに行ったとき、ある写真を見つけた。その写真は、以前山元町で行われたボランティア活動の集合写真だった。そこに映っていた人たちは、誰一人暗い顔をせず、みんなとても元気そうな表情でこちらを見ていた。そんな宮城の方々の姿を見て、私は心を打たれた。被災地の方々は、一日も早い復興を願って一生懸命頑張っているのだなと強く感じた。確かに、見た目は元気そうでも、心の奥底では本当に辛く悲しい気持ちが残っていると思う。それでも前向きに頑張ろうとしている姿は、とても素晴らしかった。

被災地には以前から行きたいと思っていたので、このような形でボランティアを行えたことをとてもうれしく思い、またこのボランティア活動を企画していただいた足高同窓会の方々への感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

今回このような体験が出来たことを誇りに思う。またこのような機会があったら、是非参加したい。いや、絶対参加するだろう。 中村 尚生

現地に行くのは3回目ですが、やはりまだまだ復興には程遠いなと一番に感じました。

今回の活動では民家と周辺の除草作業を行いました。最初は草が茂り、こんなに刈れるのかなと心配になりました。けれどみんなで協力することでかなり綺麗にすることができました。民家の作業中には流されてきたと思われる瓦の破片や食器などが出てきました。この瓦礫や物一つ一つが人の生活や思い出だったと思うと考えさせられます

作業後お寺でうかがった震災直後のボランティアに関する話も印象に残りました。山元町では震災直後ボランティアの受け入れを半年間行わず、復興作業が遅れてしまったということでした。

僕たちが今回行った活動は小さな欠片に過ぎません。しかし、このような活動を続けていけばいずれ東北が



元の姿を取り戻すと信じています。

また被災された方が感じている思いが今回のボランティアで分かりました。よくテレビや広告では「頑張ろう。東北。」など応援の言葉が掲げられていますが、被災された方は必死に頑張って復興作業をしているのです。作業している側から見れば「これ以上何を頑張ったらいいのだよ」と思われるでしょう。私たちのような直接被害に合わなかった人は、東北の被災された方の思いをもっと察していくことが必要なのです。

テレビなどでは日々、報道される回数が減ってきて、日本に住む人たちの被災地への関心が薄れてきています。復興は日本に暮らす私たちみんなの課題です。

これからも機会があれば積極的にボランティア活動に参加したいと思います。

「頑張ろう日本!!」

永島 聡

僕は、初めて被災地である宮城県山元町に行きボランティア活動をしました。そしてその山元町でのボランティア活動を通していくつか感じたことがあります。

まず、ショックを受けました。始めて見た被災地の状況見たとき家などがしっかり建ってありがれきもあまり無かったので被害は少ない場所だと思いました。しかし、同窓会の方々から家の中はボロボロで誰も住んでいないことや、踏切があっても線路は流されてしまったと聞いてとてもショックを受けました。それでもあきらめず作業をしている人々を見て少しでも被災者の方々の方力になれるようがんばりたいと思いました。

また、今回は草むしりしかできなかったのですが、今度はもっと他の事でたくさんの人々が助かるようなことをしてみたいです。そして、また機会があれば他の被災地に行ってボランティア活動をしてみたいと思います。

矢野 陸人



お寺での集合写真



足利より送られた現地の松の木